

名古屋市・静岡市の比較からみた現代の樹木信仰に関する一考察

藍場将司・原田一宏（名大院生命農）

神木に影響を及ぼす要因を特定するため、2017年7月から翌々年1月の間に、文化的な価値を有する樹木の保全制度（保存樹・天然記念物等）に登録された寺社の住職・氏子に対し聞き取り調査を行った。調査の結果本数、樹種の傾向から内陸部に多い名古屋市、海沿いに多い清水区という特徴が確認され、依拠した産業によるものと考えられた。また両地域でクスノキが最多となったことに関して、サイズや耐性等の生態的特徴と人々との関わりが関与しているものと推察された。

加えて調査対象の大半を占めた保存樹に関して制度・データの解析を実施し、寺社の樹木保全に一定の成果を挙げている一方で、その効果が短期的なものに終わる危険性も示唆された。

キーワード：伝統文化、神木、宗教

I はじめに

古来より人々は樹木に対して超自然的な力や特別な能力を感じとり、それを受け継いできた。こうした樹木に対する認識や伝承を調査した研究は、民俗学やランドスケープ形成等様々な観点から調査が為されている(1)。森林資源の観点からは、宗教的なイデオロギーが資源の濫用に歯止めをかけるのか、免罪符としての役割を果たすのか議論が為されている(2,3)。また2002年には「NPO 法人社叢学会」が発足し、鎮守の森（社寺林）が人々の生活や文化に影響を及ぼしていると主張し、これらの学術的な検証を試みている。

一方で神木そのものを学術的に検証した例は少ない。神木の定義について神社本庁に問い合わせたところ、「神社により異なり神が降りる依り代とされるものから、後年に伝承が生まれたもの、単に神社に生育するものを指すこともある」との回答があった。著名な神木を紹介するもの(4)、特定の樹種を取り上げ考察したもの(5,6)は存在したものの、神木全体を学術的に検証した例は、こうした定義の曖昧さも相まって見当たらなかった。しかし日本の森林文化について考察した西川は、生業や地域を異にする集団は異なる森林文化を持つと指摘しており(7)、樹木信仰と地域との関係を解明することは意義のあることだと考える。

そこで本研究では地域の生活・文化に密接な関係を持つ神木に着目し、その樹木に纏わる伝承と樹の特徴等の相関、地域による差異を明示し、神木に影響を及ぼす要因を特定することを目的とする。

II 方法

1. 調査地

調査地は名古屋市全域及び静岡市清水区とした（図-1、図-2）。これは主要な産業が名古屋市では第三次産業が中心なのに対し(8,13)、清水区では漁業をはじめとする第一次産業が残っており(9)、依拠した産業による差異を見るのに適していたことが挙げられ

る。また静岡市において、駿河区・葵区は後述する「保存樹制度」への指定が2015年から始まり、対象となる寺社数が少ないこと、市町村合併による樹木保全に関する制度への影響を明示するという意図から、市全域でなく清水区のみを対象とした。

2. 調査対象とした樹木

一般に文化的・社会的価値を有する樹木を保全する試みとして、保存樹・保存樹林制度、景観重要樹木制度、天然記念物・特別天然記念物制度が挙げられる。そこで当該地域において、これらに指定された樹木に関して問い合わせを行い、そのうち寺社に生育するものを調査の対象とした（表-1）。対象とした樹木の所有者（宮司・住職等）に対し伝承の有無・内容等について聞き取り調査を行った。所有者への聞き取りが出来なかった例については、氏子（神社の管理を担う地域住民）への聞き取り調査を可能な限り行った。

加えて、調査対象の大半を占めた保存樹に関して、情報を開示している全国の自治体から制度の概要に関するデータを入手し、所有者・管理者、樹種の傾向等の解析を行った。また名古屋市・清水区において保存樹所有者に対し、樹木に関する苦情の有無や制度への意識について聞き取り調査を実施した。調査は2017年7月～2019年1月のうち36日間実施した。なお保存樹制度とは「都市の美観風致を維持するための樹木の保存に関する法律」および各自自治体が制定する条例によって指定される、社会的・文化的価値を有する樹木を保護することを目的とする制度とされている(11)。

3. 語句の定義

著名な神木を紹介している文献では、神木は独特な形状のもの(6)や言い伝えが残るもの(10)とされているが、前述のようにその定義は明確に定まっていない。そのため本研究では伝承が存在するもの、良縁成就等のご利益があるとされるものを調査対象とし、中

でも神が宿る，崇られるなど超自然的な存在が関与するものを神木，そうでなく歴史上の人物などが関与するエピソードが残るものを名木と独自に定義した。厳密には神祇を信仰の対象としない，仏教の宗教施設である寺院の例が含まれるのはそのためである。またここには俗に奇木や珍木と称されるものも含まれることとなる。

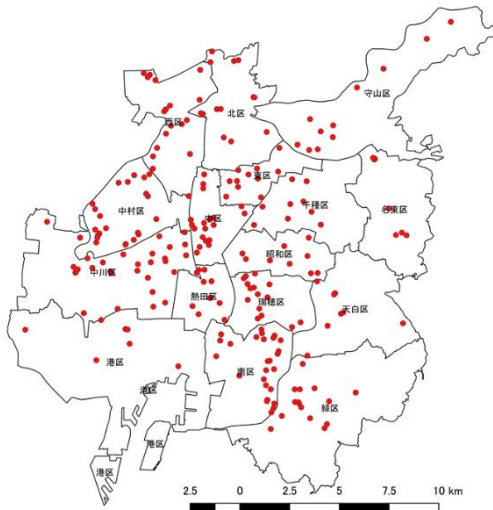


図-1. 対象とした寺社（名古屋市）

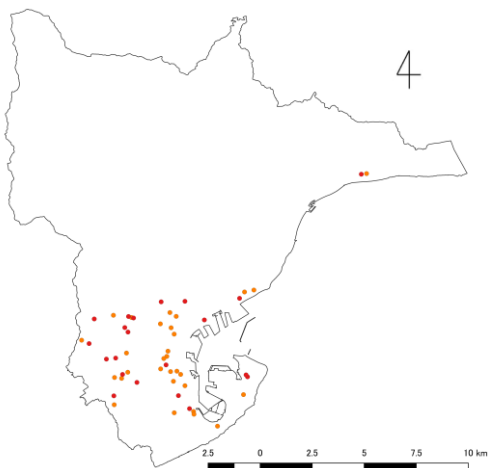


図-2. 対象とした寺社（清水区）

	名古屋市		清水区	
	寺社数	樹木数	寺社数	樹木数
現地調査	238	837	46	50
聞き取り調査 が行えたもの	174	657	22	25

表-1. 対象とした寺社数・樹木数

III 結果

1. 神木，名木の地理的分布

図-3，及び図-4 に神木と名木の地理的分布を示す。名古屋市では内陸部，とりわけ商工業が盛んであった市の中心部に多く見られた一方で，清水区では沿岸部に多く

見られた。

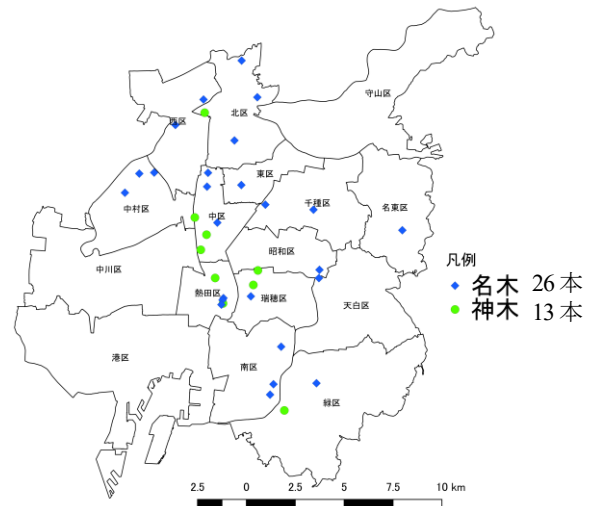


図-3. 神木と名木の地理的分布（名古屋市）

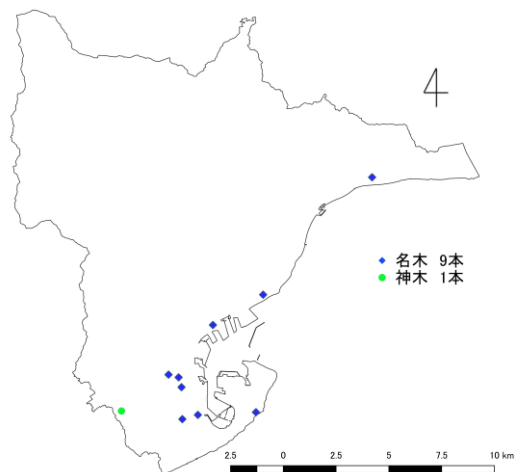


図-4. 神木と名木の地理的分布（清水区）

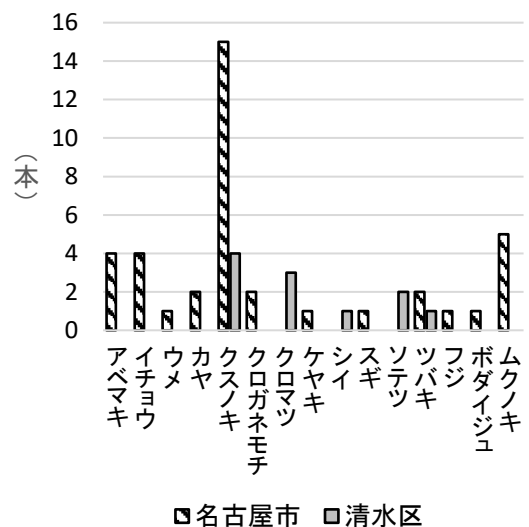


表-2. 神木と名木の樹種構成

2. 神木，名木の樹種構成

表-2 に神木と名木の樹種構成を示す。両地域ともにクスノキ（*Cinnamomum camphora*）が最多となった。

またそれぞれの傾向として、名古屋市ではアベマキ (*Quercus variabilis*)、ムクノキ (*Aphananthe aspera*) 等里山林を構成する樹種が特異的に見られた一方、清水区ではクロマツ (*Pinus thunbergii*)、ソテツ (*Cycas revoluta*) 等沿岸部に生育する樹種が多く見られ、樹種の傾向からも沿岸部に多くみられる清水区と内陸部に数多く生育する名古屋市という特徴が如実に表れる形となった。

3. 神木、名木にまつわる伝承（ご利益）

神木、名木にまつわる伝承として、両地域ともに良縁成就、健康長寿等のご利益があるものが確認された。それぞれの特徴として名古屋市では闇之森八幡社や洲崎神社等で商売繁盛に効果があるとされる樹木が見られた。闇之森八幡社の神木は樹木に龍神が宿るとされており、「黒龍様」と呼ばれ信仰の対象となっているという。その一方で、清水区では興津宗像神社の霊木や横砂の一本松に漁民が目印としたとされる記述が見られた。興津宗像神社の例では「沖からこの木が見えたときには大漁になる」という伝承が残っている。名古屋市では村上社（南区）の一例のみ海上から目印とされた木が存在したが、清水区では商売繁盛に効果があるとされるものは認められなかった。なお樹齢・伝承の成立年代に関して、聞き取り調査においてもその大半が不明であり、樹齢百年を超す単木の非破壊的な樹齢推定に関する先行研究が存在しなかったため、本研究では考慮できていない。

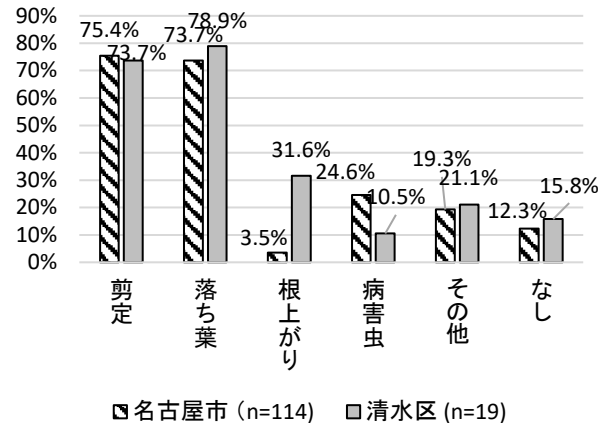
4. 神木と保存樹制度

現地調査の結果神木・名木のうち25本（全体の51.0%）が保存樹であったため、保存樹に関して制度・データの解析を実施した。制度を実施・運用している全378の地方自治体のうち123（全体の32.5%）の自治体が樹種に関する情報を公開しており、所有者に関する情報も公開していたのはそのうち61（16.1%）の自治体であった。

樹種に関しては、植生の変遷によってその構成は変化する一方で、ケヤキ (*Zelkova serrata*) やクスノキ等の樹種が地域を問わず多く含まれていた。樹種に関する情報が得られた12943本のうち、1913本（全体の14.8%）がクスノキ、1581本（12.2%）がケヤキだったことから、地域を問わず指定されている樹種が存在することが分かった。その一方で愛知県岡崎市のトヨトミナシ (*Pyrus pyrifolia ssp.*) 等その地域に固有、または希少な種が登録されている例も各所で見られた。

加えて名古屋市、清水区で制度への意識に関して聞き取り調査を実施したところ、名古屋市では有効回答があった寺社のうちの73箇所（64.0%）、清水区では16箇所（84.2%）で「今後も制度は必要だと思う」との回答があった。一方で「近隣の住民から樹に関して苦情を受けたことはあるか」という問いに対し、名古屋市では49箇所（43.0%）、清水区では12箇所（63.2%）で苦情を

受けたことがあると回答があった。中には除草剤を無断で撒かれたとの回答もあり、多くの寺社が近隣のトラブルに悩まされている実情が明らかになった。



表一3. 樹木の維持管理に関する悩み（複数回答可）

同時に樹木の維持管理に関して悩んでいることについて尋ねたところ、「剪定」「落ち葉」に関するものが大半を占めた。原則として台風等により枯枝が落ちた時の人的・物的被害の責任は所有者が負うことになるため、そのリスクに対する回答も多かった。またそれに関連して樹木が大型になることにより管理者自身で剪定が行えなくなり、業者に依頼するにもその費用が高額になる状況に頭を抱えている管理者も少なくない。

この事態に自治体も対策を講じているが、予算が限られていること、また行政自治体が特定の宗教団体に対し援助を行うのは難しいという事情もあり、金銭的な補助をこれ以上拡充させることは出来ないのではないかと名古屋市の担当者から回答があった。

また清水区の調査で、市町村合併後保存樹木に関する補助が薄くなったと感じる回答者も存在した。

IV 考察

1. 地理的分布に影響を及ぼす要因

まず産業との相関に関して、地史を著した文献では、名古屋市、清水区両地域ともに漁業従事者の存在が明記されている。しかし名古屋市では内湾漁業と呼ばれる近場での漁であったのに対し（13）、旧清水市の沿岸部で見られた形態は遠洋漁業であったとされており（14）、海から陸を確認することの頻度やそのことの重要度がより高かったのではないかと推察される。

加えて名古屋市の場合、各地に1958年9月に日本に上陸した伊勢湾台風をはじめとする風水害の影響があったことも考えられる。一之御前社（瑞穂区）の神木は、伊勢湾台風の影響で幹が折れたまま生育を続けている。また守山白山神社でも台風により境内の木々の大半が失われたと社伝に記されている。聞き取り調査の対象が五十代以上であることが多く、伊勢湾台風を経験していることも影響しているかもしれないが、その被害について

は数多くの寺社で証言や記述があった。以上から気象災害等による影響も関与しているものと思われる。

次に神木の本数に関し、名古屋市では龍神が宿るとされる樹木などが計13本確認された一方で、清水区では草薙神社の一例のみ確認された。先行研究では自然崇拜の対象に火山や海が選ばれる場合もあると指摘しており(12)、海岸線が長いのみならず海からの資源に依拠してきた清水区(14)では、信仰の対象として樹木よりも海洋が選択されてきた可能性も示唆される。この点については今後の研究の課題としたい。

2. 神木とされる樹種の傾向について

両地域でクスノキが最も多く見られた理由に関して、東海地方で頻繁に見られる樹種であることに加えて、寿命が長く病害虫に強いことがまず原因として挙げられる

(5)。加えて材木や樟脳に用いるため各地で植えられた事例、先行研究が存在することも関係すると考えられる。材木に関しては7世紀頃に、樟脳に関しては江戸時代頃にその利用があったことが記されている(15)。現地での調査でも八幡社(中村区)では材木として植えられたとの記載が確認され、また龍潭寺(中川区)で火薬としての利用を期待して植えられた事例が確認されており、有用植物としての期待があったことが伺える。

また他地域で制度に数多く登録されていたケヤキについても寿命が長いことに加え、家財への利用が奈良時代以降行われていたと先行研究で示されている(6)。

以上から特定の樹種が神木とされる原因として、サイズが大きい、病害虫に強い等の生態的な特徴と、古くからの人々との関わりが関与していると推察される。

3. 制度の観点から見た神社、寺院の樹木

保存樹制度への意識に関して、制度は今後も必要であるとの回答が多かったことから、神社・寺院に生育する樹木の保全に一定の成果を挙げていると言えるだろう。一方で近隣住民から苦情を受ける、あるいは気象災害に起因するリスクも存在し、所有者の管理に対する意欲の低下が懸念される。加えて自治体の財政状況等により支援の程度が軽くなりうることから、本制度を用いた保全は永続的でないことも不安視される。

また社寺の樹木を制度を用いて保全する理由として、自治区分の変化、拡大が考えられる。先行研究では明治以降に生産・生活の単位である「むら」から現代の行政区分である「村」への拡大が起こったことが示されている(16)。また篠原八幡社(中川区)をはじめ戦後に区画整理が行われ、点在する祠を集めて合祀した例が見られた。こうした自治区分の変化が伝承をまとめ上げ後世に語り継ぐ契機とならなかった場合、地域住民にとって神社や伝承は自分に関係ないものになってしまう。こうした地域の寺社への信仰心の薄れが、保存樹という制度を用いて寺社の樹木を保全する理由と予想される。この

点についても今後の研究の課題としたい。

謝辞

本研究を行うにあたり、名古屋市緑政土木局の榊原様、静岡市緑地政策課の浜崎様には保存樹木・樹林に関するデータを提供して頂きました。また突然の訪問にもかかわらずお時間を割いて説明して下さった各地の神社、寺院の宮司、住職並びに氏子総代をはじめとする地域住民の皆様に深く感謝いたします。

引用・参考文献

- (1) 武田行剛・加我宏之・下村泰彦・増田昇(2008) 大阪市指定保存樹を事例とした景観重要樹木選定のための評価の試み. 日本都市計画学会関西支部研究発表会講演概要集6 巻:17-20
- (2) Yanfei Geng(2017) The implications of ritual practices and ritual plant uses on nature conservation: a case study among the Naxi in Yunnan Province, Southwest China. Journal of Ethnobiology and Ethnomedicine doi: [10.1186/s13002-017-0186-3]
- (3) Notermans Catrien, Nugteren Albertina, Sunny Suma(2016) The Changing Landscape of Sacred Groves in Kerala (India): A Critical View on the Role of Religion in Nature Conservation. RELIGIONS 7 doi: [10.3390/rel7040038]
- (4) 牧野和春(1986) 巨樹の民俗学. 恒文社
- (5) 矢野憲一、矢野高陽(2010) 楠(ものと人間の文化史). 法政大学出版局
- (6) 有岡利幸(2016) 櫟(ものと人間の文化史). 法政大学出版局
- (7) 西川静一(2008) 森林文化の社会学. ミネルヴァ書房
- (8) 名古屋市市民経済局産業部産業労働課(2016) 産業の名古屋2016. 名古屋市
- (9) 統計センターしずおか(2015) しずおかけんの地域経済計算. 静岡県
- (10) 渡辺一夫(2011) 公園・神社の樹木―樹木の個性と日本の歴史. 築地書館
- (11) 国土交通省(1962) 都市の美観風致を維持するための樹木の保存に関する法律. e-Gov 法令検索
- (12) 野本寛一(2006) 神と自然の景観論 信仰環境を読む. 講談社
- (13) 新修名古屋市史編集委員会(2001) 新修名古屋市史第九巻民俗編. 名古屋市
- (14) 清水市史編さん委員会(1986) 清水市史 第一巻. 吉川弘文館
- (15) 佐藤洋一郎(2004) クスノキと日本人 知られざる古代巨樹信仰. 八坂書房
- (16) 鳥越皓之(2007) むらの社会を研究する フィールドからの発想. 農山漁村文化協会